

主催 邦楽連合会

社団法人 義太夫協会

中央区銀座六の十八の新橋演舞場B2
電話(五四二)五四七-一六番

清元協会

港区南青山二の十七の三三の一〇三
電話(四〇二)〇二四〇番

財団法人 古曲会

中央区銀座八の六の三 新橋会館
電話(五七二)〇二一六番

新内協会

品川区旗の台六の二十七の二
電話(七八二)三九五五番

常磐津協会

港区南麻布五の三の四十六
電話(四四四)三〇二〇番

社団法人 長唄協会

中央区銀座二の十一の十九の四
電話(五四二)六五六四番

社団法人 日本三曲協会

港区赤坂二の十五の十二の四〇三
電話(五八五)九九一六番

(五十音順)

後援 東京都

昭和五十九年三月四日(日)

第一生命ホール

第一部 十二時半開演 四時終演
第二部 四時半開演 八時終演

'84 都民芸術フェスティバル

第十四回

邦楽演奏会

— 邦楽名曲選 —

'84都民芸術フェスティバル参加公演（昭和58年度東京都助成公演）

種目	公演内容	期日	会場	入場料金	問合せ先	
オペラ	G.ドニゼッティ「ビバ!・ラ・マンマ」(訳詞上演) (東京オペラプロデュース)	1月24日・25日	東京文化会館	円 8,000~1,500	東京オペラ・プロデュース (363)5120	
	G.ヴェルディ「リゴレット」(訳詞上演) (二期会オペラ振興会)	2月14日~16日	東京文化会館	8,000~1,500	二期会 (370)6441	
	G.プッチーニ「蝶々夫人」(原語上演) (日本オペラ振興会)	2月24日~26日	東京文化会館	8,000~1,500	日本オペラ振興会 (371)5384	
オーピキエストラ	第15回 都民のためのコンサート	オーケストラ	1月22日~ 3月28日	東京文化会館	1,800~1,200	日本演奏連盟 (437)6837
		室内合奏	3月15日	東京文化会館	1,800	
		ポピュラー	3月6日	日本青年館	1,800	
邦楽	第14回 邦楽演奏会	3月4日	第一生命ホール	1,500	邦楽連合会 (571)0216	
新劇	シェイクスピア作「テンペスト」(合同公演)	1月10日~24日	東横劇場	3,000~2,500 学 2,000	劇団俳優座 (405)4743	
児童劇	「地平線の五人兄弟」(合同公演)	3月10日~31日	東京都児童会館 外11会場	2,500~2,000	日本児童演劇 劇団協議会 (409)1797	
バレエ	「ロミオとジュリエット」	2月4日(2回)・2回	東京文化会館	中高生 無料招待有 5,000~1,500 3,000~2,000	日本バレエ協会 (462)5524	
		2月12日	立川市民会館			
バレエ	東京バレエ団 「眠れる森の美女」	3月9日~11日	東京文化会館	9,500~3,000	東京バレエ協議会 (723)2356	
現代舞踊	「街道に残る影-黒い朝より-」・「夜会」 「空間の詩学」	1月12日・13日	東京文化会館	無料招待有 3,000~2,000	現代舞踊協会 (400)4544	
日本舞踊	第27回 日本舞踊協会公演	2月15日~17日	国立劇場	5,000	日本舞踊協会 (533)6455	
能	都民能	1月21日	国立能楽堂	2,500	能楽協会 (574)6441	
	式能	2月19日	国立能楽堂	4,500		
民俗芸能	第15回 東京都民俗芸能大会	2月25日	練馬文化センター	無料招待	東京都民俗芸能 大会実行委員会 (894)6923	
		2月26日	大島町開発総合 センター			
寄席芸能	第14回 都民寄席	2月4日~24日	品川荏原文化センター 外6会場	無料招待	都民寄席実行委員会 0423(81)5534	

これらの個々の公演種目に対するお問合せは各団体に、
助成公演全般についてのお問合せは、
東京都教育庁社会教育部文化課 TEL(212)5111
(内)44-531
(内)44-532

'84都民芸術フェスティバルによせて

東京都知事 鈴木俊一



東京都民の芸術祭「都民芸術フェスティバル」は、今年で16回目を迎えました。
このフェスティバルは「すぐれた芸術を、心ゆたかな、くらしの中へ」と願って東京都が芸術文化団体の公演費用の一部を助成し、できるだけ多くの都民のみなさんに、舞台芸術を鑑賞していただくという年に一度の催しです。

東京都は、昨年十月他の府県に先がけて「文化振興条例」を制定いたしました。この条例は、都民のみなさんがいきいきと心豊かに暮らせる「文

化の香り高いまち東京」の実現をめざして、文化の振興に関する東京都の施策の基本を明らかにしたものです。
私は、かねてから、この東京を都民のみなさんが、心から「わがふるさと」と誇りをもって呼べるまことにしたいと
念願し、マイタウン東京構想の実現に努めてまいりました。この条例の制定を契機として、広く都民の文化活動を促
進し、文化環境の整備や、国際文化交流の推進に一層の努力を傾けてまいりたいと思っております。

芸術文化の振興は、とりわけ重要な施策のひとつでありますので、今後ともこのフェスティバルを一層充実発展さ
せ、都民のみなさんにすばらしい芸術に親しんでいただきたいと考えております。

今年もこのフェスティバルが、都民のみなさんにとって、心に残る楽しい催しになれば幸いです。
フェスティバルに参加し芸術の祭典の一翼を担って下さった「邦楽連合会」の力一杯のご活躍を期待しています。

第一部番組(十二時半開演)

一、長唄 京鹿子娘道成寺(娘道成寺)

同	同	同	同	同	同	唄	清和会	清和会
和歌山	杵屋	杵屋	松崎	芳村	今藤	文子	三味線	杵屋
富野	弥三吉	六	錦	伊四郎				和以
								五三遊
								六生之
								佐浪
								伊四静
								芳村
								杵屋
								杵屋
								杵屋
								同
								同
								同

囃子

太鼓	大鼓	小鼓	脇鼓	笛
藤舎呂雪	中川一夫	藤舎成敏	藤舎清晃	中川善雄

二、義太夫 増補 忠臣蔵(本蔵下郎の段)

太夫	竹本	土佐廣
三味線	鶴澤	寛八
箏	豊澤	幸治

三、新内 明烏 夢泡雪(上)

浄瑠璃	富士松	加賀
三味線	新内	勝一朗
上調子	新内	勝次朗

四、荻江深川八景

同 同 唄
荻江 荻江 荻江
充 照 祥
同 三味線
荻江 荻江
さと こと

五、清元道行浮埸鷗（お染）

同 同 浄瑠璃
清元 清元 清元
小成 成美 登志寿
太夫 太夫 太夫
上調子 同 三味線
清元 清元 清元
静二郎 吉三郎 益寿郎

六、常磐津道行三度笠（梅川）

同 同 浄瑠璃
常磐津 常磐津 常磐津
文字増十 文字香代 文字増
上調子 三味線 常磐津
常磐津 常磐津 文字孝代

七、三曲尾上の松

尺同同同同同三箏
八 藤井 朝岡 柴田 林部 阿部 藤井
鳥居 藤井 浦陽 晃世 清子 喜美 桂子 久仁江
誠和 子世 子美 子江

第二部番組 (午後四時半開演)

一、一中道成寺鐘供養(道成寺)

浄瑠璃	管野序千	三味線	管野序和喜
同	管野序詠	同	管野序清
同	管野序枝	上調子	管野序恵美

二、新内帰咲名残命毛(尾上伊太八)

浄瑠璃	鶴賀伊勢太夫
三味線	新内仲三郎
上調子	新内勝史郎

三、義太夫奥州安達原(袖萩祭文の段)

袖萩	竹本駒之助
お君	竹本素丸
腰元	竹本越若
浜夕	竹本綾之助
倭仗	竹本朝重
三味線	鶴澤重輝

四、尺八秋田菅垣

尺八	川瀬順輔
同	久我敦彦
同	足立準之助
同	日下将孝
同	デウィッド・ウィラー

五、清元春夜障子梅(夕ぎり)

浄瑠璃 清元 富士太夫
三味線 清元 清之輔
同 清元 志佐太夫
上調子 清元 一多郎
同 清元 栄志太夫

六、常磐津辰

橋

浄瑠璃 常磐津 文字太夫
三味線 常磐津 文字兵衛
同 常磐津 一巴太夫
同 常磐津 八百八
同 常磐津 八重太夫
上調子 常磐津 文字蔵

七、長唄綱館之段―曲舞入り―

唄 稀音家 三郎助
三味線 稀音家 六多郎
同 杵屋 六美朗
同 稀音家 一志郎
同 東音 裕介
同 東音 観太郎
同 赤木 直明

囃子

笛 梅屋 幸之助
小鼓 梅屋 勝六郎
小鼓 梅屋 栄一郎
立鼓 梅屋 金太郎
大鼓 梅屋 勝彦
太鼓 梅屋 福三郎

歌詞と解説(演奏順)

(解説 竹内道敬)

第一部

一、長唄 京鹿子娘道成寺(娘道成寺)

この曲については、今さら書く必要もないほど、よく知られている。能の「道成寺」を基本にして、初演された宝暦三年(一七五三)までの「道成寺もの」の集大成曲である。作曲者として初世杵屋弥三郎の名をあげる人が多いが、むしろ編曲者といった方がいいかもしれない。とにかくすぐれた作品で、いつきいても楽しいし、何度きいてもあきない。近世三味線音楽の代表曲として、これほど広く知られた曲はない。長唄の代表曲であると同時に、広い意味での日本音楽の代表曲といつていいだろう。

謡ガカリへ花の外には松ばかり、花の外には松ばかり、暮れそめて鐘やひびくらん。
三下りへ鐘に恨みは数々ござる、初夜の鐘を撞く時は、諸行無常とひびくなり、後夜の鐘をつく時は、是生滅法とひびくなり、晨鐘のひびきは生滅々己、入相は寂滅為樂とひびくなり、きいておどろく人もなし、我も五障の雲暗れて、真如の月を眺めあかさん。

座での上演がもつとも早い。

加古川本蔵は、桃井若狭助に仕える家老職で、五百石を占めていた。若狭之助が鎌倉の殿中で高師直を斬り捨てようとするが、案に相違して師直が詫びをいうので、討ちそこなつた。それは本蔵が師直に不相应な金銀を贈っていたためだった。そのため若狭之助は、へつらい武士という悪口をいわれるようになっていた。また、松の廊下で判官を抱きとめたため、判官は思いをとげることができず、お家断絶、切腹になつてしまった。それらの責任を感じて蟄居閉門している本蔵の下郎には、若狭之助の妹の三千歳姫が預けられている。三千歳姫は、判官の弟の縫之助と許嫁なのだが、事件のために一緒になれずにいる。
その下郎へ若狭之助が井浪伴左衛門を連れてやってくる。三千歳姫をうけとり、本蔵を成敗するためである。先に来た伴左衛門は、三千歳姫に横恋慕をし、茶の湯の釜に毒薬を入れたが、本蔵に見破られてしまふ。しかしそれを知らない若狭之助は本蔵を縛り上げ、庭へ引き出して来たところから、この場がはじまる。(ここまでを「別邸茶の湯座敷の場」ともいう)
このあとの中略部分に、本蔵はさきほどの毒薬の件を教え、また若狭之助は本蔵への饒別、師直家の凶面を渡し、由良之助への土産にせよというくだりがある。(ここを「奥庭出立の場」ともいう)

へ行く水の、上へ流るるためしなく、憂きこと、積る行国が、消える間を待つ庭の面、われを仕置の芭蕉葉の、広きもいまは恨めしく、人はそれともしら州なる、御前へこそは引かれ来る。
かくと知らせに若狭之助、褥の上に座を設け、
「イヤナ本蔵。今日の成敗余の儀にあらず、その方家柄ともうし勤功に愛で、先祖より家老職を勤めさせ、知行五百石を当行う。しかるに某さいつ頃鎌倉殿において、高の師直に恨みあつてただ一刀に斬捨てんと存せしところ、きやつ低頭平身イヤヤ存外の説言。コレ心得ずと思ひしが、汝師直が屋敷へ抜けかけし、不相应なる金銀をもつて媚びへつら

二上りへいわず語らぬわが心、乱れし髪は乱るるも、つれないはただ移り気な、どうでも男は悪性者。へ桜さくらとうたわれて、いうて袂のわけ二つ、勤めさえたどうかうかと、どうでも女子は悪性者、へ都育ちは蓮葉な者じゃえ。

へ恋の分里、武士も道具を伏編笠で、張りとき意地の吉原、花の都は歌でやわらぐ、敷島原に、勤めする身は誰と伏見の墨染、煩惱菩提の撞木町より、難波四筋に通い木辻に、禿だちから室の早咲、それがほんに色じや、ひいふう三三四、夜露雪の日、下の関路も、ともにこの身を馴染み重ねて、仲は丸山ただ丸かかと、思い染めたが縁じゃえ。
三下りへ梅とさんさん桜は、いずれ兄やら弟やら、わきていわれぬ花の色え、へあやめ杜若は、いずれ姉やら妹やら、わきていわれぬ花の色え、へ西も東も、みんな見にきた花の顔、さよえ、見れば恋ぞ増すえ、さよえ、かわいらしさの花娘。

へ恋の手習い見習いて、誰に見しよとて紅鉄漿つきよぞ、みんな主への心中立て、お嬢し、お嬢し、末はこうじゃにな、そうなるまでは、とんといわずにすまそぞえと、誓紙さえ偽りか、嘘か誠か、どうもならぬほど遠いに来た。へふつり落気せまいぞと、たしなんで見ても情なや、女子には何がある、殿御殿御の気が知れぬ、気がしれぬ、悪性な悪性な気がしれぬ、恨みうらみてかこち泣き、露を含みし桜花、さわらは落ちん風情なり。

へさる程にさる程に、寺々の鐘、月落ち鳥啼いて霜雪天に、満潮ほどなくこの山寺の、江村の漁火、愁いに対して人々眠れば、よきひまぞと、立ち舞うようにねらい寄つて、撞かんとせしが、思えばこの鐘恨めしやとて、竜頭に手をかけ飛ぶよと見えしが、引きかすいてぞ失せにける。

二、義太夫 増補忠臣蔵(本蔵下郎の段)

作者未詳。「仮名手本忠臣蔵」の九段目の前にあるとふさわしい物語り。記録によると明治二十五年十一月、大阪彦六

いしゆえ、師直を討ちもらし、しかるところ諸大名の取沙汰にも、若狭之助はへつらい武士、卑怯者と殿中一杯の取沙汰と聞く。その上汝へ遺恨の次第もうし聞かせしみぎり、余が目通りで松の一枝を切り取り、まつこのとおりと金打いたしたでないか。そちや某をたばかったな」
「ハ、畏れながらわが君様へもうし上げ奉る。その不可を知つて諫めざるは不忠の第一。諫むればもつて背くに似たり。松が枝の金打、なにゆえ表裏に仕るべきや。松は後盤桃井に背きし片枝、君ご短慮の木の偏を切つて退ければ、公の一字につつがなく、国家長久祈り奉る」
「ム、スリヤ松の木偏を切り取りは国家のため、この若狭之助へ諫言とな」
「ハ、ご賢慮いかがでござりましょう」
「ム、しからは受けし恥辱はいかに」
「ハ、ア、コハ存知よらざる御仰せ。君辱しめらる、時は、臣死すともうす」

「黙れ本蔵。さいう汝がなにゆえに、なぜ切腹は仕らん。命を惜しみのめめと、蟄居いたせしはなにごと、それでも武士か。イヤサ家老といふか。すでに伴左衛門がもうすには、本蔵をきつとご成敗なさらねば、お家の瑕瑾に相成ると、某へ数度の諫言。せひに及ばず、伴左衛門にもうし付け、その方を死罪に行う、しかし余を恨むであらうな」
「コハ勿体なき御一言。下司下郎のなすべき太刀取り、伴左衛門に仰せ付けられ、死後の面目ハ、アありがたく存じ奉る。さりながらただ一言もうし上げたきは台子の釜」
というを打消し伴左衛門。
「ヤイ、本蔵々々。いまになつて一言も二言もないわい。自体うぬ、殿様のご遺恨ある師直を討ちもらしその上、陪臣者のうせる場所でもない大広間へうせおつて、判官公を抱き止め、一つとしてろくなことをささぬ奴だ。そのような馬鹿者を生け置かば後日の妨げだわい。イヤ御前。や、時移ればご掃館の妨げ、イヤ成敗」
と裾引上げ、すでに討たんと立寄る井浪。
「ア、コリヤ伴左衛門待て、待てといえばまず待て、イヤサ急ぐことではない。すべて大罪人は長く生け置き、苦しめるも仕置の一つ。モいかにしても憎い本蔵。余人に討たすも残念。身が討捨てん。ソレその刀をこ、へ持て」
と、優美の顔色、しずく庭へおり立って、

らぬ天下、一の鳥居の夕照は、家並静かに鄙さびて、またひとしおの、
永代寺の晚鐘、聞いておどろく鳥もなし、冬の木場には雁落ちて、た
ぐいなづなの春景色。あれ見よさんさ、これ見よさんさ、さんざやんさ
で走るささ舟。客は船拍子おも楫や、とり楫、舟は変ろと主かわらず
に、来てくれ河岸に、それを船拍子おも楫が、八月まどかにや塩浜の、秋は短か
き夜半なりと、思い合うたる仲町の、そもや土橋の渡り初め、逢い初め
し夜が緑じやもの、心と心が合点なりや、指切り、髪切り、入ればくろ
野暮な起請も神々さんへ、お世話をかける筈もなし、ああ辛気ああ辛
気。口舌洲崎の風も暗れて、富士をいただく明日の夜は、へ佃の雨に千
鳥啼く、恋しさよ、ゆかしさよ。都の風の吹かまほし。へ時去り時うつ
り、朱の鳥居のありがたや、これぞ名に負う八幡の、宮居涼しく幣とり
あえず、へ神のいさめの神子の鈴、ふるやふるふる、二軒茶屋の暮の雪
ききしにまさる八景は、おもしろや、面白や、へあれあれ、あれを見渡
せば、沖の鷗のあなたへひらり、こなたへひらり、漁る業や曳く網の、
いともかしこく見えにける。

五、清元道行浮埜鷗（お染）

四世鶴屋南北作詞、清元齋兵衛作曲。文政八年（一八二五）
十一月、江戸中村座で「鬼若根元台」という顔見世狂言の二
番目序幕に初演された。

曲は清元の道行ものの代表曲といわれるほどの名曲で、舞
踊としてもよく上演されている。
内容は、油屋の娘お染と丁稚の久松が、想う仲が添われぬ
のを悲しんで心中しようと思つた隙に、偶田堤へやってくる。そこへ猿廻
しが来かかり、二人の様子を見て猿まわしにかこつけて意見
をする。が、二人ともやはり死なねばならぬと、その用意を
するまで。

へ今も昔は瓦町、名代娘のただ一人、おくれ道なる久松も、まだ咲きか

お染へこれ久松、もうやがて夜明け、
久松へドレそろ／＼と参りましようか、
猿廻へオット待ったり、ヤそれでお前方の身の上もその前髪といい、こ
のお娘が今久松といたたからは、いよ／＼この頃噂のある、
兩人へエエ、

猿廻へマ……何であろうとわしがいう事を、ハテマア聞かっしやりませ
ヤヤア

へここに東の町の名も、聞いて鬼門の角屋敷、合瓦町とや、油屋の一人
娘にお染とて、へ年は二八の細眉に、内の子飼いの久松と、へ忍び忍び
の寝油を、親達や夢にも白紋り、へ二人は蕾の花盛り、紋りかねたる振
りの袖、梅香の露の玉の緒の、末は互いの吉丁字、そこで浮名の種油、
へ意見まじりに興じける。

久松へすりや世間ではそのように二人が事を、
猿廻へ門附または唄祭文、浮名の立つをうたててく思い、ひよんな心にな
らしやぬよう、

兩人へエエ、
猿廻へ春を取り越すお猿萬歳、御寿命長久祝うてここで、ヤ奏でましよ
うか。

へ猿若に御萬歳とは、櫓も栄えてまします、青陽新玉の年立ち返る周
の春、愛嬌ありけるぼつとりもの、へ二八十六で諸人のひっぱる色娘、
お染といつたら立ったりしよ、へお猿は目出度や目出度やな、
猿廻へエイ／＼さりととは／＼。

へかよう申す才歳なんぞは、太鼓の撥がむつくりむつくり、むつくりむ
つくりむつくり／＼、ソウレむつくりしやんとおつ立って、ほほやれほ
つほやれ、まんざらこやまつちやらこ、まんざらこじや、ありやせまい、
へ百万年の寿と、祝いに祝うて猿曳は、里ある方へと走りゆく。
久松へハテ知らぬ人とはいいいながら、親切なるあの意見、さりながら浮
名の立った二人が仲、

お染へそれじゃによつて、わたしや覚悟を、
久松へすりやどうあつても、
お染へ二人一緒に、
久松へお染さま、
お染へ久松、

かる室の梅、へ蕾の花の振り袖も、内を忍んでよう／＼と、そこで互い
の約束は、心もほんに隅田川、人目堤の川岸を、辿り辿り来りける。
久松へモシお染様、如何に深い御縁とはいいいながら、お主の娘御を連れ
まして死のうなぞとはもつたない道知らず、いわば現在主殺し
も同然、

お染へコレイナア久松、またお主といやるかいの、互いに死のうと覚悟
して、内を出たのはそれも何故、そのように二人一緒に居ればこ
んなうれしい事はないわいの

久松へイエ／＼今になってこの身をいとうのではこさりませぬが、私と
一緒にお果なされては第一お家へきづのつくこと、どうぞ貴女は
承らえて、夜の明けぬ間に内方へ、モシお掃りなされて下さりま
せ。

へお染はじつと顔を見て、あれまたあんな無理いうて、そんなその様な
いいわけを、へ小さい時からなまなかに、手習いまでも一つ所、何やら
草紙へ書いたのを、へうらみつらみも何からと、袖に縋りて涙ぐむ、娘
心ぞ可愛らし

久松へや誰やら向うへ、サ暫し木蔭へ。
へ朝湖が筆を写し絵に、まねて三升の彩色も、三筋は足らぬ猿曳が、
二上りへ得意廻りの口祝い、宿の出かけにや唄衆とさして、ぐつと熱燗
ひつかけたえ、顔は太夫と花紅葉、へまさる目出度や真赤いな赤かんべ、
べい／＼本調子へ独楽じやなつけれど、くるりやくるりのら廻り、くる
りつと廻つて菜種の蝶よ、へ流れ渡りの隅田堤、機嫌上戸の氣も軽く、
浮かれ拍子に来りける。

猿曳へイヨーじよなめく／＼、見れば男と女の二人連れ、ハハアこり
やでつきり三廻りのレコさがおれを化かしに出たな、よし／＼お
狐ならば太夫が爪で正体を、

久松へアアコレ滅相な、
お染へそのようなものじやないわいな。
猿曳へヤそんならこなさん達は人間か、テモマア美しいものじや、して
またなんで夜更けにこの辺へ、
久松へアアソレハオオソレ／＼、この三廻りの稲荷様へ年まいりに来ま
したわいな。
猿曳へフーンそれは御奇特な、

へ顔見合わせて目は涙、へ今は二人もつかの間に、弥陀の御国に隅田川、
蓮の台の新世帯、いざ言問わん都鳥、あしと橋場の明け近き、はや長命
寺の鐘の音も、ここに浮名や流すらん、ここに浮名や流すらん。

六、常磐津道行三度笠（梅川）

近松門左衛門の「冥途の飛脚」（正徳元年）は、梅川忠兵
衛の物語りを美化した代表作で、不朽の名作であることはい
うまでもない。その書替として、続いて紀海音の「傾城三度
笠」（正徳三年）が書かれ、さらに「けいせい恋飛脚」（安
永二年）が作られたが、とりわけその「新口村」の段が好評
を博し、以後ここだけが独立して上演されるようになった。

梅川忠兵衛が男の孫右衛門に別れを告げる場面だが、人物
設定、風景描写、心理の表現に涙を絞らせる。天保八年（一
八三七）九月、江戸中村座で初演されたこの常磐津曲は、義
太夫の詞章と曲節を尊重しながらも、常磐津の特色を十分に
發揮した曲で、味のある曲となっている。常磐津が江戸の義
太夫といわれるのも、さこそと思わせる。時間の都合でその
一部を省略して演奏する。

へ大阪の、義理と故郷の恩愛の、道は二つに別れども、血筋ばかりは一
筋に、道場参りの帰り足、身を知る雨の小止みなく、野風に送る烟道、
孫右衛門は老の足、歩むとすれど、とほとほと、野口の溝の薄氷、滑る
をとまる高足駄、鼻緒は切れて横ざまに、どうと転べば、へ忠兵衛これ
は南無三と、もがけども出られぬ身、へ梅川あわて走り出で、抱き起し
て裾紋り、

梅川「もしも子ども痛みは致しませぬか、お年寄の危い事、足も洗い
鼻緒もすげてあげましよう、やれやれ危い事でござりましたな」
孫右衛門「ああやれやれ、どなたか知らぬが、忝うござる、おかげで怪我
も致しませなんだ、若い女中のおやさしい、年寄めと思し召し、嫁
御もならぬ御介抱、もうもう手を洗わしやつて下さりませ、幸いこ

ここに粟は沢山、鼻緒は私がすげます、もうもう構わしやう下ざり
ますな、ささ、手を洗わしやう下ざりませ」

梅川「あもし、ここに好い紙がござんす、こよりひねってあげましよ」と、

「延べ取り出すその手許、孫右衛門不思議そうに、
孫右衛門「むう、ここらあたりに見馴れぬ女中、まあこなさんほどなたな
れば、このようにねんごろにして下さる」と、

「顔つれづれと眺むれば、
梅川「あい私は、おおそれそれ旅の者、私が舅の親父様、ちようどお前
のお年ばえで、格好も生き写し、他の人にする奉公とは、さらさら
以て存じませぬ、お年寄った舅御様の、伏し悩みの抱きかかえ、孝
行は嫁の役、御用にたうて何ぼうか嬉しうござんす、さぞ連れ合
は飛び立つようにも思われましよ、ああ申しその紙とこの紙と、
替えて私が申し受け、父御に似たる親父様の、形見にさせとござ
んす」と、

「塵紙袖に押し包む、涙にそれと知られけり。
「言葉の端に孫右衛門、さてはそうかと恩愛の、つきぬ涙を押し隠し、
孫右衛門「むう、こなたの舅にこの親爺が似たというての孝行か、ああ嬉
しうござる、嬉しうござるが、腹が立ちますわいの、私も年長けた
倅めを様子あつて、久離切り大阪へ養子にやうたが、傾城という魔
がさして、人の金を盗んだとやら、揚句に所を駈落したとの噂、こ
の大和は生国なれば、十七軒の飛脚仲屋、お上からは隠し目附、あ
るいは順礼古手買、節季候にまで身をやつし、この在所は詮議最中、
それも誰ゆえ傾城の嫁御ゆえ、近ごろ愚かな事ながら、世のたとえ
にもい通り、盗みする子は憎う無うて、繩かける人が恨めしいと
はこの事よ、久離切った親子なれば、なに好かろうか悪かろうか、
別して構う事はなけれども、大阪に養子に行つて、利発で器用で身
を持って、身代もよう仕上げたあの様子を、勘当した親は大きな
たわけ者と、指さしせられ笑われたら、何ぼうか嬉しうござろうに、
今にも探し出され、繩かかって曳かると、あれ見よ孫右衛門は目
水晶、よう勘当した、でかしたと褒めらるるのが悲しうござるわい
の、それを思えば一日も」

「早う往生お救いなされて下さると、拝み願うは今参る如来様、御開山
孫右衛門「兩人さらば」
「子ゆえの闇の目なし鳥、平沙の唄う血の涙、長き親子の別れには、安
方ならで安からぬ、心残して別れ行く。」

七、三曲尾上の松

歌詞のはじめは能の「高砂」からとり、それにおめでたい
歌詞を加えて御代の万歳を祝した曲。もとの曲は九州系の地
歌三絃古曲だったが、宮城道雄が大正八年に箏の手を付けて
から知られるようになった。
曲の構成は、前奏―前唄―手事―中歌―手事―後歌とい
うもので、手事物の大曲。はじめの手事は「楽三段」ともい
われ、雅楽風な曲で品格が高い。あとの手事は「神楽拍子」と
もいわれ、二段の手事とチラシから成る。
箏は四上り半雲井調子、三絃は本調子。

〔前奏〕
「やらやらめでたや、めでたやと、唄い打ち連れ尉と姥、その名も今に
高砂の、尾上の松も年古りて、老の波も寄り来るや、木の下蔭の落葉か
くなるまで、命長らえて、なおいつまでか生きの松、千重に栄えて色深
み、琴の音通う松の風、太平楽の調べかな。」

〔手事〕
「豊かにすめる日の本の、恵みは四方に照り渡る、神の教えの跡垂れて、
尽きじ尽させぬ君が御代、万歳祝う神かぐら、みしみんなの前に八乙女の
袖振る鈴や振り鼓、太鼓の音も笛の音も、手拍子揃えていさぎよや。
〔手事〕
「あら面白やおもしろや、とささぬ御代に相生の、松の緑みどりも春来
れば、今ひとしおに色まさり、深く契りて千歳ふる、松の齡を今日より
は、君にひかれて万代を、春に栄えん君が代は、万々歳と舞い歌う。」

仏にうそがつかれましようかいの、仏に嘘がつかれましようかいの、仏
に嘘がつかれましようかと、どうと伏せば、梅川もわつと声をあげ、忠
兵衛は窓の内、手先を出して伏し拝み、身を揉み嘆くぞ道理なる。

〔中略〕

「涙の隙に巾着より、金一包み取り出だし、
孫右衛門「あれこれ、これはの、京の御本寺様へ上げようと思うた金な
れど、嫁、いやなに嫁御と思うてやるではない、ただ今のお札のた
め、これを路銀にちつとなど、遠い所へさあさあ、早う早う」

梅川「ああ、ありがとうござりまする、お心付かれしこのお金、さかさ
まながらいただきます」

「大阪を立ち退いて、私が姿目に立てば、借り駕籠に日を送り、奈良の
旅籠や三輪の茶屋、五日三日夜を明かし、二十日あまりに四十両、使
果して二歩残る、金ゆえ大切の忠兵衛さん、科人にしたも私から、さぞ
憎かろうお腹も立とうが、因果すくじやとあきらめて、お許しなされて
下さりませ、親子は一世の縁とやら、この世の別れに、せめて一目逢
うて進んで下さんせと、立つ梅川を、押し止め、
孫右衛門「ああこれこれ、やくだないもない、ただ今い通り、たとえ言
葉は交さいでも、顔見合わせたりや繩かけるか、己が口から訴入せ
にや、養い親への義理が立たぬ、何ぼう義理が立てたいとて、現在
親の手すから、どう繩がかけらりよぞいの、どう繩がかけらりよ
ぞいの」

梅川「お道理でござりまする、そんならお顔を見ぬように、もつたいな
い事ながら、この煩冠りでお前のお眼をこうさえずれば、たとえお
そばにいやんしても、何と構いはござりまするまいがな」

孫右衛門「おお、忝うござる、物いわずと顔見すと、手先へなどさわつた
ら、それが本望逢うた心、親子一世の暇乞い、かならず必ずこなた
の連れ合いに、物いわせて下さるなよ」

梅川「あい」

「親子手に手を取り交せど、互いに親ともわが子とも、いわずいわれぬ
世の義理は、涙わき出る水上を、身も浮くばかり泣きかこつ、
孫右衛門「あれあれ、あの人声は確かに追手、この裏道の小川を渡り、藪
を抜ければ巨勢街道、早う早う」〔中略〕

梅川「さあそれは」

第二部

一、一中道成寺鐘供養(道成寺)

一 中節は元禄のころ、初代都一中が語りはじめた浄瑠璃で、
その後、菅野派と宇治派が生れ、現在は都派とともに三派が
ある。それぞれに特色があり、独自の語り物もあるが、なか
でも菅野派は、比較的古風な味わいを伝えているといわれて
いる。
菅野派のこの「道成寺鐘供養」は、能の歌詞を借り、文久
元年(一八六一)に発表されたもので、菅野里八(のちの四
世清元齋兵衛)と四世菅野序遊が作曲したもの。白拍子が舞
うところに吉原情緒をとり入れているのが特色で、このあと、
道成寺の物語りと祈りがあるが、時間の都合で前半の鐘入り
までを演奏する。

「これは紀州道成寺の住僧にて候。さても当寺に於いて、久しく撞鐘退
振仕りて候を、このほど再興し、鐘を鑄させて候。今日吉日にて候ほ
どに、鐘の供養を致さばやと存じ候。またさる仔細ある間、構えて女人
禁制の由、遠近人に告げ渡る、鐘の供養の始めなる。
「作りし罪も消えぬべし、作りし罪も消えぬべし、鐘の供養に参らん。
「これはこの国のかたわらに住む白拍子にて候、さても道成寺と申す御
寺に、鐘の供養のある由を、皆人ごとに夕間暮れ、月は程なく入汐の、
煙り満ち来る思いぞと、こがれこがれて小松原、待つ夜恨めば暁の、鷄
より辛い鐘の聲、かこち馴れたる予言の、手管に実もこもりくの、鐘も
霞むや初瀬寺、懺悔に罪も消えなんと、色ぐ心かまだ暮れぬ、日高の寺
に着きにけり。」

へこれはこの国のかたわらに住む白拍子にて候、鐘の供養を拜ませ給わ
り候と、へきくよりそれと強きども、もつとも拜ませたくは候えども
女人禁制と仰せ付けられ候間、叶い申すまじく候。へいや余の女とは変
り、白拍子にて候ほどに、鐘の供養に一さし舞を舞い候べし。いわれ
こなたはうちうなずき、へさあらばわれらが心得を以て、拜ませ申そう
折節ここに烏帽子の候、これを着て面白う御舞い候え。へあら嬉しや、
涯分舞を舞い候べし。へ嬉しやさらば舞わんとて、あれにまします宮人
の、烏帽子をしばし仮りに着て、すでに拍子をすすめけり。
へ花の外には松ばかり、暮れ初め鐘や響くらん。二上りへまず長樂の
鐘ならで、花の上野か浅草か、雲より落つる佛は、桜物いう道中に、松
の位の八文字、対の禿を連れたるは、三浦の君が物好きや、はじめて廓
を橋の、ナオスへ昔の香り桂木が、雷を廻らす卯の花の、舞の袂を移り
舞い、末社が囀す糸竹に、恋の山口来てみれば、いつか揚屋へ入相の、
かねて花を降らすらん。へさるほどにさるほどに、はや後朝の遠寺の
鐘、月落ち鳥啼き霜雪天に、満汐ほどなく日高の寺の、江村の漁火愁い
に対して人々眠れば、へよき隙ぞと、立ち舞う様に狙い寄つて、撞かん
とせしが、思えばこの鐘恨めしやと、竜頭に手をかけ飛ぶぞと見えしが、
引きかすいでぞ失せにける。

二、新内 帰咲名残命毛（尾上伊太八）

伊太八は界屋の尾上と馴染んでもう二年、そのため親から
は勘当、金に困っている。一方の尾上も幼い時に両親に別れ
七つの歳から吉原で育つた身の上である。その尾上に身受け
話もちあがって、明日にもひかされそうなのだが、伊太八
はどうすることもできない。金の工面をしてくるといって、
やっとならば愚痴ばかり、そして男が脱いでみせた肌着は白無垢
尾上も簞笥をあけて、死装束に着替えるのであった。

の身やとても、心に二つはないわいな、たとえ私が請け出され、御新造
さんの奥さんのと、人にかしづき敬われ、上見ぬ驚で暮らしても、いや
な男に添い寝して、朝夕気がねをするよりも、やっぱり二人が手鍋提げ
手づから私が飯焚いて、内の者よ、こちの人、明日はどうして、こうし
てと、いうが楽しみ、わしや嬉し
伊太八「はて、いつまでいっても尽きぬこと、どうで今宵は過されぬ、
俺は覚悟をしている」と、
へ押し肌脱げば白無垢の、思いつめたる死出立、へ尾上は悲しき嬉しき
に、手早く簞笥押し明けて、ともに着替える晴小袖。

三、義太夫 奥州安達原（袖萩祭文の段）

宝暦十二年（一七六二）九月、大阪竹本座初演。近松半二、
竹田和泉、北窓俊一、竹本三郎兵衛の合作。八幡太郎義家に
滅ぼされた安倍頼時の遺子貞任、宗任兄弟が、復讐を計る苦
心を主に、奥州の伝説をとり入れた作品で、奇抜で複雑な構
成の五段物。

なかでもすぐれているのが、二の切の文治住家、三の切の
鎌伏切腹、四の切の一つ家で、それを中心に上演されること
が多い。とくに三段目は、通称を「安達三」とか「袖萩祭文
の段」といわれ、長い舞台生命を保っている。
とくにこの「袖萩祭文」は、雪の中、盲目となった袖萩が
娘のお君に手を引かれてやってきていながら、門口で親子を
名乗ることができない。祭文にことよせて切なる思いを述べ
るといふくだりで、くり返し上演されている。時間の都合で
このあとの鎌伏切腹は省略。

へ立って入りにける。たださえ曇る雪空に、心の闇の暮近く、一間に直
す白梅も、無常を急ぐ冬の風、身にこたゆるは、血筋の縁、不憫やお袖

実際の心中事件にヒントを得て、鶴賀若狭権が作った新内
節端ものの代表曲。時間の都合で、もつともよく知られてい
る尾上のクドキと伊太八のクドキを中心にした下の巻を演奏
する。伊太八のクドキへわずかな筆の命毛で……というの
は、勘当された伊太八が、手習師匠をして暮していることを
あらわしている。

へあとに尾上は伊太八が、顔つくづくとうち眺め。
尾上「私という者ないならば、こうした身にもならんすまい、親御様
の御勘気も、みんな私が仕業ぞや」

へ逢い初めてより一日も、烏の啼かぬ日はあれど、お顔見ぬ日はないわ
いな、朝の帰りもまだ早い、もう一服と抱きしめし、その言の葉が居続
けと、しげりし故にお前の身、仇となしゆく悲しやな、許して下んせ八
様と、手を合わせ伏し拝み、思わずわつと泣き出だす。
伊太八「これやかましい、静かにしや」
尾上「やあ、お前はよう寝て」

伊太八「はて、どう寝られうぞ、まずこちらへおじや」と、
へ床の内、あたりの襖たてこめて、しばし物をもいわざりしが、
伊太八「まことに古人のいいおきし、人界の栄枯は、あざなえる繩の如
く、水上の泡に似たり、この頃は夜の目も合わず食事さえ、胸を通
さぬ身請け沙汰」

へ家に代え、親に代え、身にも代えたるそなたをば、人手に渡すが口惜
しさに、
伊太八「さまざま才覚してみれど、おしつまつたる金のこと、誰に談合
するあても、内証知つたは、そなたばかり、生れ付いての商人さえ、
今の世渡り過ぎにくい、ましてや昨日今日までも、武家で育つた俺
がこと、勘当受けて丸二年」

へわずかな筆の命毛で、住み永らえるその日過ぎ、男の身でさえ生きに
くい、送つて出やる肌薄な、姿を見れば胸一杯念、昔の身ならばどのよ
に、仕様もようも知つたれど、この身になつては一言の、言葉の札より
外はない、ふつふつ恨みと思わぬと、身を恨み、泣き沈み、声立てられ
ぬ床の内。
へ尾上はいとどしゃくり上げ、好かぬことをいわしやんす、いかに流れ

はとぼとぼと、親の大事と聞くつらさ、娘お君に手を引かれ、親は子を
杖子は親を、走らんとすれど、雪道に力なく辿り来て、垣の外面に、
「ア、嬉しや、誰も見咎めはせんのだの」「イ、エ門口に侍衆が、居睡
つていやしやつた間に」「オ、賢い子じや、鎌伏様はこの春から主のお
屋敷にはござらず、この宮様の御所にと聞いて、どうやらこうやらここ
まで来ごとは来たれど、ご勘当の父上母様、殊に浅ましいこの形で、
誰が取り次いでくれる者もあるまい、お目にかかってご難儀のようすが
どうぞ聞きたや」と、探れば触る小柴垣、「ム、ここはお庭先の枝折門、
戸を叩くにも叩かれぬ不孝の報い、この垣一重が鉄の」門より高う心か
ら、泣く声さえも憚りて簞笥に、喰い付き泣き泣きいたり、
鎌伏はかくとも知らず、「垣の外に誰やら人声、アレ女どもはおらぬか」
と、いつつ自身庭の面、外にはそれと懐かしさ、恥づかしさもまた先
立って、掩う袖萩知らぬ父、明けてびっくり戸をびつしやり、「なんの
ご用」と腰元ども、涙ゆうも庭に立ち出でて、「鎌伏殿なんぞいの」「
イヤなんでもない、見苦しいやつがうせおつた腰元ども追い出せ、ば
ば、あんなもの見るものでない、こつちへお来やれこつちへお来やれ」
と夫の詞は氣も付かず、「なにをきよときよといわつしやる、犬でも這
入りましたか」と、なに心なく戸を開けて、よくよくすかせば娘の袖萩
はつと呆れてまたばつたり、娘は声を聞き知れど「母様か」とも得もい
わず、母は変りし形を見て胸一杯に塞がる思い、押下げ押下げ、「定め
ない世といながらテモさても思いがけない」「コレコレばばなにい
やる」「イヤさあやっぱり犬でござんした、ほんに憎い犬め、親に背いた
天罰で目もつぶれたな、神仏にも見離され、定めて世に落ち果てておろ
うとは思つたれど、これはまたあんまりきつい落ち果てよう、今思い知
りおつたか」と、よそに知らずも涙声、ようす知ねば腰元ども、「さ
つても慮外な、物貰いなら、中間衆には貰わいで、お庭先へむさくるし
い、とつとと出や」とせり立てられ、「ハイハイどうぞござんさされて
まらつとの間」「ハテしつこい」と女中の口々、「ヤレ待つてくれ女子
ども、ヤイ物貰い、お銭が欲しくばなせ歌を歌わぬぞ、願いの筋もなん
なりと、歌うて聞かせ」と夫の手前、ちつとの間なと隙入れたさ、「あ
い」とはいえど袖萩が、久しぶりの母の前、琴の組とは引きかえて、露
命をつなぐ古絃に、皮も破れし三味線の、

「ばちも慮外も願ずお願い申し奉る、

伊左衛門「こりやもうその涙にこりたもの、ここな万歳傾城め、万歳ならば春おじや、通りや通りや」と、

「いいければ、

夕霧「むう、この夕霧を万歳とは」

伊左衛門「お万歳傾城の因縁知らずか、侍の足にかけて蹴らるるを、万

歳傾城というぞや」

「まことにめでとう、さむらいける。

伊左衛門「しかも足駄はいて蹴るやら」

「年立ち返るあしだにて、まことにめでとう、さむらいける。

伊左衛門「何と聞こえたか、さりながら、何も身すぎ、あの様なよい衆に

蹴られては損はいかぬ、欲を知らねば身が立たぬ」

「欲若に御万歳とや、年立ち返るあしだにて、まことにめでとう、さむらいける。

伊左衛門「町人も蹴る、伊左衛門も蹴る、やあ、ける蹴るける」と、

「蹴ちらかし、煙草引き寄せ吹く煙管の、さらぬていにていたりける。

(中略)

「ところへ喜左衛門は立ち出で、

喜左衛門「申し伊左衛門様、お前の御勘当もゆりまする、里の御子息

様も母屋へお引き取り、夕霧様の身受けもさりと埒あけました、

さあさあ、めでたいはめでたいは」と、

「家内が勇む勢いに、連れて浮き立つ伊左衛門、よろこびの眉を開くや

扇屋夕霧、名を万代の春の花、見る人袖をぞつらねける。

六、常磐津 辰

橋

河竹黙阿弥作詩。はじめ素浄瑠璃として書いてあったものを、五代目尾上菊五郎の希望により、明治二十三年十月東京歌舞伎座で上演された。このとき渡辺の網を市川左團次、扇折早百合実が鬼女を五代目菊五郎が演じ、新古演劇十種の一つとなった。

参りまするが、ただ一人ゆえ夜道がこわく、ここにたたずみおりました。こわいと申すはもつともなり、五条のわたりへ参るとあらば、それがし送ってつかわそう。御詞に従いますれば、お伴ない下さりませ。折から空の雲晴れて、月の光に見かます顔。はてあてやかな。水に映りし影を見て、はやや、今水中へ映りし影は、へええ。夜更けぬうちに、いざ疾くとく。西へ廻りし月の輪に、遠く望ぬば愛宕山、北野は近く清滝の、森を越えくるとときぎす、初音ゆかしくふり返り、見上ぐる顔にはら／＼と、樹々の雫も雲運ぶ、雨かとしはし立ち休らい、へ歩き馴れぬ夜道にて、さぞくたびれし事ならん。へいいえ、妻よりあなたこそ、足弱をお連れなされ、おくたびれでござりませう。へしばらくこれで憩われよ。へ連れ立つ道に馴れ易く、今は隔ても中空の、蹴ろも春の名残かな。へ都人とはいいながら、いとみやさしき形風俗、御身が父は何人なるぞ。へ父は五条の扇折、舞を好みて舞いし故、妾も幼なき頃よりして、教えを受けしが身の徳に、このほどまでもある御所にお宮仕え致しました。へ恥かしながらそれがしは、いまだ舞を見たることなし、ひとさし舞を見せられまいか。へお送り下さるそのお札に、只今御覽に入れませう。へ女性は扇借りうけて、会釈をこぼし進み出で、へ空も霞みて八重一重、桜狩する諸人が、群れつつこへ清水や、初瀬の山の雪と見し、花の散り行く嵐山、惜しむ別れの春過ぎて、夏の初めに後れにし、花も青葉に衣がえ、樹々の緑の美しや。へいや面白き事なりしぞ、かかる技芸のある者を、妻に持ちなばよき楽しみ。へいうをこなたはよきしおに、へ定めてあなたは奥様を、お持ちなされてござりませうな。へ未だ妻は娶らぬが、見らるる通りの武骨者、誰も妻になり手がな。へなに無いことがござりませう。へお情深きお心に、今宵見えし妻さえ、縁を結ぶ露もがな、思ふ恋路の初螢、へいい出でかねて胸焦がし、若葉の闇に迷うもの、都女郎はとりわけて、へ姿やさしき花あやめ、引きつ引かれつ沢水に、袖も濡れにし事ならん。へそれは御身の思い違い、かかる名もなき田舎武士、誰が思いをかけようぞ。へいえい立派なお名ゆえに。へなに立派な名とは。へ当時内裏を警衛に、都へ上りし源の、頼光朝臣の身内にて、渡辺源次綱ゆえ。へやいかがしてその名をば、へ恋しく思ふ殿御ゆえ、とくより存じております。へ恋しく思ふというは偽り、御身がわが名を存せしは、妖魔の術であらうがな。へ星を指されてうちおどろき、へなに妖魔の術とは。へみめよ

主君源頼光朝臣の命をうけ、維仲卿の姫君のもとへ使いに立った渡辺の綱が、帰り途に堀川の辰橋にさしかかると、美しい女があらわれて道連れをもとめた。一緒に歩くと、それは愛宕山に住む鬼女だったので、正体を見あらわし、源氏の重宝髪切丸の太刀でその片腕を切り落とすという筋。七代目常磐津小文字太夫と六代目岸沢式左の苦心の自作で、明治時代の常磐津の代表的作品といわれる。歌詞も作曲も活歴風だが、明治という新しい時代の息吹きの感じられる常磐津で、流行している。

へそれ普天の下卒土の涙、王土にあらぬ所なきに、いづくに妖魔の棲みけるか、陸月の頃より洛中へ、悪鬼あらわれ人を取り、夜は往来の人もなし。へされば内裏の警衛に、都へ上りし源の、頼光朝臣は暇なく、へ去る頃深く語らいし、維仲卿の姫君へ、便りもなさでおわせしが、へ今日しも渡辺源次綱、使いに立ちし帰り道、卯の花咲いて白々と、月照り渡る堀川の、早瀬の流れ落ち合せて、水音すこき辰橋。へ武威たくましき我が君も、恋は心の外にして、かねがね語らい給いたる、維仲卿の姫君へ、密々の仰せこむりて、路次の用意に御秘蔵の、髭切りの太刀賜りしは、武門のほまれ身の面目、片時も早く立ち帰り、かの御方の御返事を、我が君へ申し上げん。へ夜ふけぬうちにと主従が、行かんとなせし後ろより、一吹き落す青嵐に、岸の柳の騒がしく、心ならねばふり返り、へはて心得ぬ、妖怪出ずる取沙汰に、夜に入りては表を鎖し、男子すら通行せぬに、女子の来るはいぶかしし。へさてはわれらをおどさんと、姿を変えて妖怪が、こへ来ると覚えたり。幸いなるかな討ちとつて、へ君へ土産に参らせん。へ二人の者にうちささやき、へ機密を授け退けて、へおのれ妖怪ごさんなれ。へ太刀引きそばめほの暗き、木下蔭へぞ入りにける。へまたむら立ちし雨雲の、かげ洩る月をよすがにて、三下りへたどる大路に人影も、灯影も見えず我が影を、もしや人かと驚きて、被衣に身をば忍ぶ措、けうの細布ならずして、女子心に胸合わず、思い悩みて来りける。へ卯月の空の定めなく、降らぬうちにと思えども、こは一条の辰橋、見れば行き交う人もなく、へああ便りもなやとたたずみて、しばし休らいたりける。へ綱はこかげを立ち出でて、へ女性はいずれへ参らるるぞ。へ妾は一条の大宮より、五条のわたりへ

き女に化するとも、その本性は悪鬼ならん。へなんと。へ汝は心づかさりしが、月の光に映りたる、影は怪しき鬼形なりしぞ。へやあ。へその本性をあらわせばよ。へいうに妖女もたちまちに、憤怒の相をあらわせば、へ後ろにうかがう郎党が、観念せよと組付くを、事ともなさずふり払い、へ我は愛宕の山奥に、幾年棲みて天然と、業通得たる悪鬼なり。車輪の如き目を見開き、炎を吐きし有様は、身の毛もよだつばかりなり。へさてこそ悪鬼でありしよな、へいでこの上は汝をば、わが隠れ家へ連れ行かん。へこしやくな事を、へひつ立てゆかんと立ちかかれば、綱はいけどり呉んずと、勇力振う時しもあれ、へ一天俄かにかきくもり、震動なして四方より、黒雲おおい重なりて、綱が襟上むんずとつかみ、へ砂石を飛ばす暴風に、連れて虚空へ引き上げれば、へ髭切の太刀抜き放し、鬼の腕を切り払い、どつと落ちたる北野の廻廊、へ悪鬼はむらがる雲隠れ、光を放ちて失せにけり。

七、長唄 綱

館

明治二年、根岸の勘五郎といわれた十一代目杵屋六左衛門作曲。このもととなったのは、寛保元年(一七四一)七月江戸中村座上演の「兵四阿屋造」で、これを復活したものだ。歌詞はほとんどそのまま使っている。

この曲は六、で演奏された「辰橋」の後日物語で、辰橋で鬼女の腕を切り落して帰った渡辺綱は、このような悪鬼は七日以内にその腕を取り戻しに来るといわれ、阿倍晴明のいいつけ通り、門戸をどぎしてひきこもっている。そこへ綱の故郷から伯母が尋ねて来て、強引に家の中へ入りこんでしまふ。そしてせびともその腕を見せてくれといひ、見ているうちに鬼女の正体をあらわし、腕をとりもとして虚空に消え去るといふ筋。

曲全体が劇的要素を持ち、筋がわかり易くできているので、流行している。なお、新古演劇十種の「炭木」は同じ趣向の

曲だが、これは明治十六年に三代目杵屋正治郎が作曲したもので、素ではあまり演奏されない。

へさるほどに、渡辺の源次綱は、鬼神の腕を切り取りつつ、武勇を天下に輝やかせり。へさりながら、かかる悪鬼は七日のうちに、かならず仇をなすなりと、陰陽の博士、晴明が勘文にまかせつつ、へ綱は七日の物忌して、仁王経を誦誦なし、門戸を閉じてぞいたりける。へすでに東寺羅生門の、鬼神の腕を切り取りしこと、これひとえに、君の御威徳ならずや、然るに、晴明が勘文にしたがい、あら気づまりの物忌やな。
へかかるところへ、津の国の渡辺の里よりも、訪ねて伯母のきたしぐれ、へ紅葉の笠も名にめでて、錦をかざすふるさとの、孝の力や杖つき乃の字の姿をも、うしとはいわで牽かれつる、綱が館に着きにけり。へ門の外にたたずみて、いかに綱、津の国の伯母がはるばる参りたり。この門開き候え、疾く開けめされい。へ内には綱の声高く、はるばるとの御出なれど、仔細あつて物忌なれば、門の内へはかなわす候。へなに、門の内へはかなわぬとな。へ是非に及ばず候。へあら曲もなき御事やな。和殿が幼なきその時は、みづから抱き育てつつ、九夏三伏の暑き日は、扇の風にて涼がせつ、玄冬素雪の寒き夜は、ふすまを重ねあためて、和殿を綱といわせしこと、ああ皆みづからが恩なりすや、恩を知らぬは人ならず。ええ汝は邪慳者かなと、声をあげてぞ泣き給う。へさしにも猛き渡辺も、あくまで伯母に口説かれて、是非なく門をおし開き、奥の一間に請じける。

へ伯母を敬い頭を下げ、さても只今は不思議の失礼仕つて候、まず御酒一献きこし召し、その後御曲舞を所望申し候。へめでたき折なれば、舞おうするにて候、へ御酒の機嫌をかりそめに、差す手引く手の末広や、へあら面白山の山廻り、二上りへまず筑紫には彦の山、讃岐に松山降り積む雪の白峰、河内に葛城、名に大峰、丹波丹後の界なる、鬼住む山ときこえしは、名も恐ろしき雲の奥、舞の合方へなつかしや。
本調子へいやとよ綱、鬼神の腕を切りとられし武勇のほど、凡そ天下にかくれなし、してその腕はいづこに在りや。へすなわちこれにと唐櫃の蓋うち開けて、伯母の前にぞ直しける。へそのとき伯母はかの腕を、ためつすがめつしげしげと、眺めながめていたりしが、次第しだいに面

色変り、かの腕を、取るよと見えしがたちまちに、鬼神となつて跳び上り。へ破風を蹴破り現われ出で、あたりを睨みし有様は、身の毛もよだつばかりなり。へいかに綱、我こそ茨木童子なり。わが腕を取り返さんそのために、これまで来ると知らざるや。へ綱は怒りて早速を踏み、斬らんとすれども虚空にあり。へいかにかなして討ち取るべしと、思えど次第に黒雲おおい、鬼神の姿は消え失せければ、かの晴明が勘文に、背きしことの口惜しさよ。なお時を得て討ち取るべしと、勇みたつたる武勇のほど、へ感ぜぬ者こそなかりけれ。

御 礼 邦 楽 連 合 会

本日はようこそお出かけ下さりまして、ありがとうございます。何かと不行届の点もあります。お許しを願ひまして、どうぞごゆつくりとお楽しみ下さいますよう、お願い申し上げます。

今までには、このようにしてまとまって鑑賞していただく機会は、少なかつたように思います。その少ない機会を大切にしよう、出演者も一生懸命でございます。これからもどうぞ続けて邦楽に変わぬ御支援をいただけますようお願い申し上げます。

来年も三月十日(日)に、このホールでの演奏会を予定しております。番組がままりましたら御案内をお送りいたしますので、はさみ込みのアンケート用紙に、おとところ、お名前をお書き込みの上、受付にお渡し下さいますよう、お願い申し上げます。また、今日おきき下さいました御感想や御意見などもお寄せ下さいまして、よりよい邦楽のために御指導を賜りますよう、合わせてお願いを申し上げます。

ありがとうございます。